

## 初期青年期の家族関係に関する一研究

— 青年の情緒的自律性と親子間の葛藤及び親の精神健康との関連から —

寺澤 めぐみ

### I. 問題と目的

青年期は子どもからおとなへの過度期である。子どもがおとなへと成長、発達するこの時期には、自己の内面に関心が向きはじめ、心理的自立への欲求が芽生えて外部からの影響を受けずに自分自身の意志によって判断、決定し、行動することを欲する。このような自律性 (autonomy) が発達する段階で、子どもにとって外部からの影響として最も大きいものは、親からの影響が考えられる。子どもが青年期に入ると自律性が増してくるため、親から心理的に独立しようとし、親からの干渉をうるさがり、反抗的・否定的な態度をとったりする。青年期における家族関係の変容は、青年の独立と自由への欲求とそれまでの親の一方的権威という両者の相いれなさが、これまでになかった葛藤を引き起こすことによってもたらされる。

しかし一方で、精神的に全く独立し得るほど成熟していない青年は、親に依存しなければならない面もある。子どもの反抗や干渉の拒否に遭い、これまでと違った子どもに対してとまどいを覚える親も多いが、親は子どものそれぞれの発達段階に応じて保護をし、それと同時に自立した人間になるよう成長を促進するように働きかけていかなければならない。独立性と依存性についての多くの研究 (高橋, 1968a, 1968b, 1969; 加藤・高木, 1980, など) では、青年は、親との精神的な結び付きを基盤として独立していくことが示されている。青年は中学生の段階で意識のうえでは独立性が高いが、実生活の面では極めて親に依存的であることが一般に示されている。つまり自己が独立しているという意識は必ずしも親から独立していることと結び付いていないのである。青年の自律性の発達は、こうした自己の独立性と親への依存性との関連からとらえられよう。そしてこの自律性は、親との肯定的な関係のもとで発達することが指摘されている (Kandel & Lesser, 1975)。

親子関係は生涯を通して続く永続的な関係であるが、その関係は常に変化し、発展する。子どもが青年期にさしかかる頃、多くの親は中年期を迎える。一般的に中年期は、生物学的にも社会的・心理的にもまた、家族サイクルの側面においても変化の多い時期である。この時期の親子関係は、子どもの思春期的変化はもちろん、親自

身の社会的環境の変化、発達の変化にも影響されている。一方には子どもの発達があり、他方には親自身の変化があり、Hill, J. (1980) はこうした親の視点からも青年の発達や親子関係の変化をとらえることの重要性を指摘している。

青年と両親の間の葛藤は、青年の要求と発達の変化によるといわれてきたが、最近では親の要因——中年としての status, 親の統制などがストレスに役割を演じているとの指摘がある。Silverberg & Steinberg (1987, 1990) は、青年の発達と親子関係の性質は、中年成人としての親の自己ならびに精神健康と関連すると考え、両者の関係を検討している。

以上のような観点から本研究では、親子関係の変容が始まる初期青年期に視点をあて、この時期の家族の発達を規定する要因として、青年の発達の変化と親の発達の变化の両側面から見た親子関係の変化を考え、青年の情緒的自律性、親子間の葛藤と葛藤時に生起する感情、および親の精神健康との関連について初期青年期の家族関係を明らかにしていく。以上のことから次の仮説を導いた。

仮説1: 親の精神健康が高く保たれているほど子どもが自立した人間になるよう成長を促進するように働きかけていくことができ、青年の情緒的自律性の独立性の側面が発達するであろう。

仮説2: 親との葛藤の頻度そのものよりも、葛藤時に反抗・混乱感情が高くなると独立性と依存性のバランスがとれなくなり、青年の情緒的自律性に影響を及ぼすと考えられる。また、親が葛藤に対して感情的に受け入れられないと、青年の情緒的自律性に影響を及ぼすであろう。

仮説3: 親の精神健康は、子どもとの葛藤の頻度そのものよりむしろ、葛藤時に生起する感情に関連が見られるであろう。

### II. 方法

中学生とその両親を対象に質問紙調査を行った。各学年約150家族が対象となり、有効回答は303家族 (男子139, 女子164) から得られた。実施に際しては、子どもには学級ごとに集団で実施され、両親には各家庭で回答してもらった後封筒に入れ、子どもを通して学校に提出

してもらった。質問内容は以下の通りである。

<子ども用>

①親（父親・母親）との葛藤について

日常生活における葛藤的な事柄をどの程度経験しているかを尋ねる。計13項目。

②葛藤時の感情について

親（父親・母親）との葛藤が生じたときに生起する内的混乱・不安感情について尋ねる。計6項目。

③情緒的自律性について

「独立性」（9項目）、「親（父親・母親）への依存性」（7項目）の2つ側面からとらえる。

<親用>

①子どもとの葛藤について

子ども用の質問項目と同様のもの。計13項目。

②葛藤時の感情について

子どもとの葛藤が生じたときに生起する内的混乱・不安感情について尋ねる。計14項目。

③精神健康について

精神健康を「日常生活の満足感」（10項目）、「自尊感情」（9項目）、「夫婦感情」（13項目）の3側面からとらえる。

Ⅲ. 結果と考察

親子間の葛藤の頻度について、性（2）×学年（3）の2要因分散分析を行ったところ、親との葛藤の頻度については、母親との葛藤において男子よりも女子のほうが葛藤が多いと報告しており、父親との葛藤においてはこのような男女差は見られなかった。これは男子の方が母親との葛藤が少ない、とは一概に言えず、女子は一方で母親への依存性が男子よりも高いことから、母親と話をしたりしてかかわりあう機会そのものも多いことが考えられ、このような結果になったと思われる。女子の方が母親との間で葛藤の頻度が多いと報告されたが、一方で依存性も男子より高く、独立と依存のアンビバレントな感情が強いと思われるため、そのことがより葛藤として感じられるのではないかと考えられた。

子どもの情緒的自律性、親子間の葛藤、および親の精神健康の関連を検討するために、①父一息子関係、②父一娘関係、③母一息子関係、④母一娘関係という親子二者関係におけるそれぞれの特徴について見ていった結果、どの親子関係においても、親の報告する葛藤と子どもの報告する葛藤、子どもの報告する親との葛藤と葛藤感情、親子の報告する葛藤感情に相関が認められた。また、親

の生活満足感と自尊感情、夫婦感情に有意な相関が見られ、互いに関連しあって精神健康に影響を及ぼしていることが伺われた。

母一息子関係、母一娘関係においては、母親の報告する葛藤感情と生活満足感、自尊感情との相関が認められた。つまり子どもとのかかわりにおける母親の葛藤時の混乱感情は、日常生活の満足感や自尊感情といった精神健康面に影響を及ぼすのである。あるいは精神健康の低さが、親子間の葛藤を青年期の子どもの自主独立への要求の高まりとして受け入れられず、混乱感情を招いてしまうのかもしれない。母親については、仮説3が支持されたといえよう。

子どもの情緒的自律性への影響について検討するため、父母の葛藤頻度、葛藤感情、精神健康について、それぞれ水準分け（高群一低群）して分析を進めた。その結果、独立性には父親の葛藤感情と母親の精神健康が影響を及ぼしていることが明らかとなり、父親の葛藤感情、母親の精神健康ともに、低い群の方が高い群よりも子どもの独立性が高いことがわかった。そして親への依存性については、子ども自身の葛藤感情が影響しており、その親への葛藤感情が低い群の方が、依存性が高いことがわかった。つまり、葛藤の頻度にかかわらず、葛藤時の反抗・混乱感情が高くならなければ親との情緒的つながりを保ち続けることができるというよう。また、親の葛藤頻度と葛藤感情との関係から子どもの情緒的自律性への影響を検討したところ、父親・母親ともに葛藤の頻度ではなく、葛藤感情の方が子どもの独立性に影響を及ぼす要因となっていることが明らかとなった。

これらの結果から、仮説1の子どもの情緒的自律性と親の精神健康の間の相関関係は見られなかったものの、子どもの独立性には母親の精神健康が影響を及ぼすことが示唆された。そして仮説2の子どもの情緒的自律性に影響を及ぼすのは、葛藤の頻度よりもむしろ葛藤時に生起する感情の方が大きいであろう、という考えは今回の調査結果から支持されたといえる。

以上、初期青年期における家族関係を、青年の情緒的自律性、親子間の葛藤、および親の精神健康との関連から見てきた。この時期の親子関係におけるある種の変容は、青年だけでなく中年期の親にとっても意味をもつことがわかり、青年の発達や親子関係の変化をこうした親の視点からもとらえることの重要性が示唆された。